

Viator

VOL.021



聖ヴィアトールの記念日にあたって



主任司祭 ウィリアム神父

皆さん、聖ヴィアトールの記念日おめでとうございます。19世紀にフランスのリヨンで生まれたヴィアトール会は、現在、オセアニア以外のすべての大陸で活動する修道会となりました。今日は世界宣教の日でもあります。世界中の宣教師と宣教地の人々が豊かに福音を伝え、神の愛を知ることができるよう、祈りましょう。

今日は、聖ヴィアトールの生き方を思い起こし、そしてヴィアトール会の創立者であるルイ・ケルブ神父が目指した使命を再確認したいと思います。

ケルブ神父は18世紀の終わりにフランスのリヨンで生まれました。ケルブ神父が活躍した時代はフランス革命の影響が強い時代でした。皆さんはフランス革命をどのように思い描くでしょうか。日本ではあまり知られていないかもしれませんが、フランス革命は教会を弾圧し、破壊しました。ですから、当時の人々の心もまるで荒野のようでした。ケルブ神父は、人々の心を信仰によって豊かなものにしたいと考えました。このためにケルブ神父は、私たちの修道会を創立し、その模範として4世紀の聖ヴィアトールを守護者として選びました。ではケルブ神父が選んだ、聖ヴィアトールとはどのような聖人でしょうか。

聖ヴィアトールは日本ではあまり知られていない目立たない聖人です。たぶん世界的にも、それほど有名な聖人ではありません。聖ヴィアトールは読師と呼ばれる、

現代にはない階級の聖職者でした。読師とは聖書を朗読する専門職で、信仰教育の教師の役割を担っていました。やがて、ヴィアートルは、仕えていた司教と一緒に、フランスの町を離れエジプトの砂漠に向かいました。そして、無名の修道者として亡くなるまで砂漠で静かな祈りの生活を送りました。

読師にはもう一つ大切な役目がありました。それは当時貴重だった聖書を保管して、後の時代に残すという役目です。当時は、民族や宗教の違いから人々が争う時代でした。他の宗教の民族と戦いになった時、一番

はじめに攻撃されたのが教会です。イエスを中心とした小さなグループから生まれた教会は、いつも危険が近くにありました。その中でも、力強く聖書を守り、御言葉を伝え続けた人たちがいたのです。ヴィアートルもそのひとりだったのでしょう。現代まで名前の残っていない彼らが、現在の北白川教会にいる私たちに来るまで福音と信仰を伝えてくれたのです。そしてケルブ神父は、たとえ目立たない存在でも、聖書と人々の信仰教育のために生き、神のために命を捧げた聖ヴィアートルに設立した修道会の使命を重ねたのだと思います。

洛北ブロック夏期学校

——「自然の中で神様に会う」——

マリア・フランシスカ T・Y

7月15、16日に京北山国の家で、24名の小中学生、3名の高校生がサブリーダーとして参加し、洛北ブロック夏期学校が行われました。北白川教会からは6名の子どもたちが参加しました。山国教会で山国教会の信徒の皆さんと一緒にごミサに与ってから、京北山国の家に向かいました。



京北山国の家は、豊かな自然に囲まれた環境の中にあり、「自然の中で、神様に会う」というテーマに恰好の場所です。西日本豪雨の後でしたので、川の増水や土砂崩れ等心配したのですが、全く問題なく、川遊び、飯盒炊爨、キャンドルサービス、星の観察などすべてのプログラムを予定どおりに行うことができました。

とても暑い日でしたので、川の水の冷たさがとても気持ちよく、子どもたちは、すぐに川遊びに夢中になりました。小石に足をとられながら水の感触を楽しんで歩いていく子、流れの速い所を見つけ、座り込んで水の流れの強さを楽しんでいる子、珍しい模様の小石を探す子、サワガニを必死につかまえようとする子、思い思いに川

遊びを楽しみました。

昨年に続き、2回目の参加の子が多かったせいでしょいか、飯盒炊爨ではとても要領よく準備ができました。火おこしの大変さ、煙が目にも染みたり、炭火の熱さを感じたり、やがて、ご飯の炊けるいい匂いがして来たときのワクワク感、とても充実した時間を過ごしました。飯盒で炊いたご飯は、カレーライスでとてもおいしくいただきました。心もお腹も満腹になりました。

京北山国の家は、廃校の小学校を利用した施設なので、広いグラウンドがあります。暗くなるのを待って、グラウンドでキャンドルサービスをしました。街灯はあるものの街中と違って周囲は、真っ暗です。皆で輪になって一人ずつゆっくりろうそくに火をともしました。少しずつ明かりが広がっていくのを静かに眺めて待っている時間は、仲間との一体感を味わうことができました。神父様の祈りの招きで、心を神様に向け、一人ひとり心に神様を迎え入れました。その後、ブルーシートに寝転んで、星空を眺めました。去年は、雨のため星が見られませんでしたので、この時を子どもたちは、とても楽しみに待っていました。地面に寝転がって空をまっすぐに眺めていると、どこまでが空なのかわからなくなります。宇宙の中にいるような不思議な感覚になりました。夜空に光る星はとても美しく、子どもたちは、いつまでも飽きずに眺めていました。「神様とお話をした」「神様が見ている気がする」と話してくれた子どももいました。

2日目の朝の散歩では、少し山の中に入りました。ほんの少し入っただけなのですが、気温が2、3度低く感じられました。木や草の香りに包まれ、爽やかな朝の空気を味わいました。子どもたちは、小川を見つけてさっそく生き物を探したり、丸太の橋を渡ったりして楽しみまし

た。

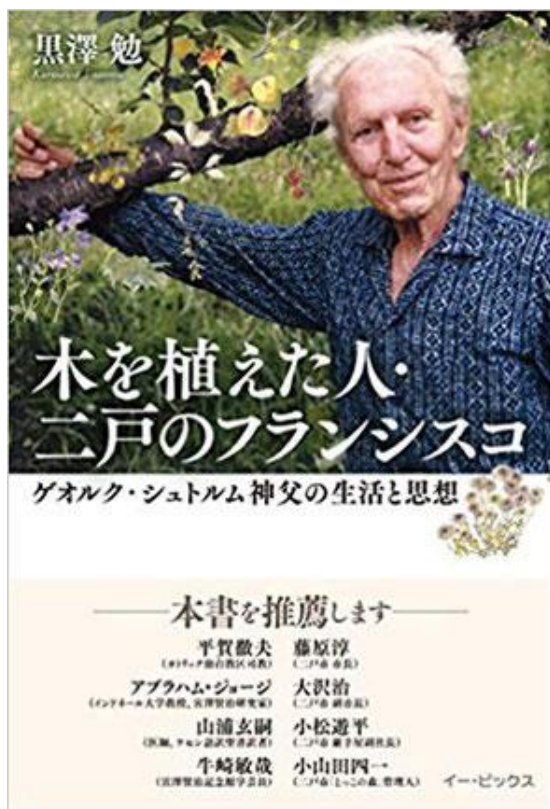
食事の後、グループで協力して、聖書クイズラリーをしました。グループで、縄跳びをしたり、風船バレーをしたり、水風船を作ったりとおもしろい仕掛けを楽しみながら、聖書のクイズを解きました。

プログラム最後のみ言葉の祭典で、子どもたちは、今回の夏期学校で一番感動したことを絵で表現して神様にお捧げしました。

仲間と一緒に豊かな自然環境の中で五感を働かせて思いっきり自然を体験し、神様を賛美し、感謝のお祈りを捧げたことで子どもたちは、ますます神様を好きになり、身近に感じられるようになったことと思います。

酷暑の中、無事に夏期学校を終えることが出来たことを神様に感謝いたします。また、神父様をはじめ山国教

会の皆様、お手伝いくださった保護者の皆様、お祈りで支えてくださった教会の皆様のご協力に感謝申し上げます。どうぞこれからも日曜学校の子どもたちを温かくお導き、お見守りくださいますようお願いいたします。



世界一小さな教会の主任司祭

マリア・ヨハンナ M・M

スイスに本部があるベトレヘム外国宣教会のゲオルク・シュトルム神父様(1915-2006)。中国宣教から撤退した後、来日し、盛岡で日本語を学び、岩手県南部の大籠教会に赴任します。アルプスに生まれ育った神父様はそこで、酪農を通じて宣教しようと思しますが、神父

が労働をすべきではないと当時の司教が反対し、別の教会に転勤となります。そして、1959年、自ら志願して岩手県北部の二戸^{にのへ}教会に赴任します。信徒は10名に満たない世界一小さな教会(推定)です。神父様は二戸の家を一軒一軒訪ね、キリスト教に関心がある人はいないかと聞いて回りますが、誰もおらず、がっかりしたと言います。

失意の中でも祈り続ける神父様。聖務日課を唱える代わりに、ギターを片手に自分でメロディーをつけて歌います。二戸に移った翌年、オリジナルの聖歌集『バイブル・ソング』を出版。若い頃に隠修士に憧れトラピスト修道院に入ることさえ考えた神父様は教会の敷地で山羊を飼い、畑を借りて小麦や野菜を育てて自給自足の生活を送りながら、地元の植物画を制作したり、宮沢賢治の童話を知ったのをきっかけに童話を創作し、童話集『子山羊とフランシス』『幸せの種』を出版。もともと宮澤賢治イーハトーブ賞は辞退したそうです。

工事で樹木が伐採された山を見たのがきっかけで、教会の庭で種から苗を育てて、木を植える活動を始めます。各地に2000本の苗木を植えて、岩手日報文化賞を受賞。御聖堂も神父様が木から彫った十字架像や聖母子像などが飾られました。

神父様の帰天後、残念なことに、二戸教会は道路拡張工事のため取り壊され、もはや訪れることができません。しかし、私たち信者は、残されたさまざまな作品を通して神父様の霊性を知り、失意と孤独と貧しさの中でも

祈り続け神から与えられた素質(タレント)を大きく育てることを神父様の生き方から学ぶことができます。たとえ信者が少なくても教会は教会なのです。

神父様を紹介する黒澤勉著『木を植えた人・二戸のフランシスコ』(イー・ピックス)から神父様の言葉をいくつか引用しましょう。

「農業が一番美しく、尊い仕事です」。

「聖務日課を歌っているとき、私ははっきりイエズスに助けられていること、イエズスが自分の中に働いていることを意識します。信仰はペトロが言うように「冷静な酔い」であり、単に感情に支配されるのではなく、義務のように実行し続けるものです」。

「スイスでは神父を頼んで植物を聖別します。…聖別を、プロテスタントは迷信だと言いました。しかしカトリックの信仰では、すべての自然の中に神の霊の働きを信じています」。

「神は決して人に強いることはなく、ただ提案するだけです。私たちは神の提案を受け入れその御旨を果たすべきです。それは多くの場合、小さく、つまらないように見えます。しかし、それはイエズスのもとに入ると、大きなこととなります」。

神父様のお母様はフランシスコ会の在俗会員で、神父様自身フランシスコを慕っていたことから、黒澤氏は神父様を二戸のフランシスコと呼んでいます。神父様の出身地スイスから、カトリックではありませんが、アルプスの少女ハイジや、晩年スイスに住んで庭仕事をしながら水彩画も製作したヘルマン・ヘッセも連想されます。いずれも日本人によく親しまれています。宣教師としての神父様の願いは、神父様が天に戻られたこれから叶えられるかもしれません。

(ホームページより転載)

編集後記

今年の夏は、これまでに経験したことのない暑さ、西日本豪雨、大型台風、北海道の地震と災害が続きました。

京都は、災害が少ないところと安心していましたが、台風 21 号は、多くの文化財を直撃し、街路樹や山間部の木々を倒し、大きな被害をもたらしました。私事ですが、この台風では、初めて 14 時間の停電を体験し、再び電気が通るまでの時間、心細さと不便さを味わいました。電気は明け方に、パッと灯りました。その時、心にも灯りが灯るような明るい気持ちになったことを思い出します。と同時に、一晩中、台風の惨禍の中、電気の復旧のために働いた人の存在があったことを思いました。そして、今もなお、被災地で不便な暮らしの中にある人々の心労を思いました。私の平和な日常が、電気をはじめ、多くの人の働きに支えられているように、私も不便さや困難な中にある人との連帯の中にいたい、そう思わされた小さい災害体験になりました。

『Viator』21 号を発行いたします。今号には、3 つの寄稿がありました。

ウイリアム神父様は、ヴィアートル会の守護者聖ヴィアートルについて紹介してくださいました。神父様が記されているように、聖ヴィアートルは、日本ではあまり知ら

れていない聖人ですので、北白川教会に属していても、どのような聖人かご存じない人もいらっしゃるかもしれません。無名の修道者として目立たない聖ヴィアートルを知る機会になったことと思います。

2つめは、洛北ブロック夏期学校のレポートです。レポートを読むと、子供たちが、豊かな自然の中で楽しい体験をたくさん積み、神様に心を向けた様子が、生き生きと伝わってきます。読み手まで、楽しく明るい気持ちになるような内容です。子供たちの体験をうらやましいなあ、と思いました。

3つめはゲオルク・シュトルム神父について書かれた図書の紹介です。こちらを知っている人の方が少ないであろう神父様。ゲオルク神父様は、2006 年に亡くなっていますが、亡くなるまでの 47 年間で世界一小さな教会という二戸教会ではたらかれました。その神父様のはたらきと霊性をもっと知りたくなる紹介です。

読書の秋でもあります。図書を通して、聖ヴィアートルやゲオルク神父様の霊性をより深く知り、少しでもそれぞれの霊性を深める時にするのにも良いのではないのでしょうか。

バプテスマのヨハネ F・A